
アーセニア

宿野部 湊闇

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アーセニア

【ZPDF】

N1298G

【作者名】

宿野部 滉闇

【あらすじ】

五つの大陸と一つの島で成るアーセニア。そのアーセニアに住む少年達の物語

ただいま、リニューアルにつき休刊中

プロローグ

五つの大陸と一つの島で成る星、アーセニア
最も大きく水が豊富にある大陸ウェンディア。

火山が多い大陸サライ。

砂漠の大陸ノーメニア。

ほとんどが標高の高い山で成るシルモント。

この星の誕生の地として知られるバハニア。

そして、島全体が要塞と化した帝国、ボーガイン帝国

* * * * *

バハニアに長い黒髪をベッドに散らし、青い眼をした少年が城にある自室で眠っていると、

城に地響きが響き渡った。

少年は飛び起き部屋の外に出た。

石造りの廊下には帝国独特の赤黒い鎧を着た騎士とバハニアの象徴。ドラゴンの紋章が描かれた鉄甲冑を身につけた下級兵士が先頭に入っていた。

「何が起きた！？」

「て、帝国の襲撃です！」

少年は近くを走っていた兵士を呼び止め尋ねると、

「やうやうと兵士はバタバタと戦闘に入っている所に向かっていった。

少年は自室に戻り剣と甲冑を身に纏い、髪を後ろにまとめて縛り玉座に向かった。

「陛下、無事ですか？」

玉座に入るなり声を張り上げるが、すでに遅く、王は敵兵の凶刃に倒れていた。

「キサマー」

少年は剣を抜き、陛下の所に行ひとするが、帝国兵が少年の田に立ちはだかる。

數え切れないほどの敵兵をなぎ倒していくと一際田立つ黒い騎士が王の前に立っていた。

「はあ、はあ。陛下を殺したのはお前か」

少年は息を切らしながらも黒い騎士に聞く。

黒い騎士は無言のまま少年を見据える。

少年は剣を構え直すと、騎士も剣を抜いた。

少年は騎士のこいみ合ひが続き、少年の方から仕掛けた。

しかし、剣は一瞬のうちに飛ばされたりて見えない力の壁にぶつかり、少年も飛ばされた。

「グハツ」

少年は壁に呑みつけられ地面に伏せる。

「ぐわつ」

立ち上がりうつとすると、全身に痛みが走り、近くにあつた剣を支えによりやく立てるくらいだった。

「……」

黒い騎士は無言のまま少年の前に立ち、彼の首筋に刃を向けた。

くわ、このままではやられてしまう。その前に……

我、四精靈を束ねしバハムートの契約の元今風精靈シルフの力を見せん。

ウインドウスリップ

心で呪文を唱え風が彼の周りを包み込み、やがて風があさまると彼の姿は消えていた。

プロローグ（後書き）

よろしければ、評価をお願いします。

第一章 1・空から落ちてきた少年（前書き）

第一章 記憶の旅

第一章 1・空から落ちてきた少年

長い黒髪の少年は田をさますと木の天井が写っていた。

「うう」

少年は至る所から痛みが来る体を起こし、回りを見渡す。木でできた壁に床、ガラスの無い窓。

少年が呆然としているとドアが開いた、

「あら、田が覚めた？」

入ってきたのは14、5歳くらいの少女だった。嬉しそうな顔する。

「うふ……ううううう。それに君は？」

少年が聞くと、

「UJUJはティアーズ。UJの国の最北端の地。私はルナ。ルナ・ギルバートよ。貴方は？」

「僕は……」

少女の問いに答えようとするが、答えられなかつた。必死で思い出すとするが頭がまるで深い霧にかかつたように真っ白だつた。

「もしかして思い出せないの？」

ルナの不安そうな緋色の目が少年を見る。

「……」

少年は青い目が下を向き、ぎこちなく頷くと、

「そう。あつ、そうだ。名前が思い出せないのなら。」

肩まであるブロンドの髪をいじりながら何かを考えていると、

「少年△はどうかな」

ルナが言つと、少年は

「え？ それはちょっと」

言いづらそうな顔をする。

ルナはそれを知つてか知らずか、いくつか出して見る。

「村人1、プリンス大蔵、怪人24面相 etc」

「全部却下するよ」

少年は明らかに名前じゃないもの幾つかあってあからさまにため息をつくる。

「それじゃ、カインって名前はどう?」

ルナがようやくまともな名前が出たと思つ少年は、

「カイン？」

「そう、カイン。太陽の子つて意味よ。私のルナつて名前は月の子つて意味なの。気に入つた？」

恥ずかしそうなに頬が紅潮し、思わず吹いてしまった。

「カインか……いい名前だね。気に入つたよ。ありがとう、ルナ」少年は嬉しそうな顔をした。ルナはさらに赤くなつて、「そ、それじゃ。私、村の人々に知らせてくるね」

ルナは走つて部屋を出て行つた。

不思議そうなにルナが出て行つたドアを見つめていた

カインと名前が付けられた少年はルナに連れてこられた医者に診てもらいあと数日の中止が必要だといわれてしまった。

「ねえ、ルナ」

医者が出て行つたあと、後片付けをしていたルナに話しかける。

「なに？」

ルナは手を休めてカインのベッドの縁に座る。

「僕がどうしてここにいるか押してもうえるかな？」

カインは彼女の眼を見て言つと、

「言つてなかつたけ。あなたが空から墜ちてきたのよ

絶句した。まさか、空から墜ちてくるとは思わなかつたからだ。

「でも不思議なのよね。あんな高さから落ちたら普通は死ぬんだけど」

ルナはカインを不思議そうに見つめていた。

「空からね。……ありがとうルナ。」

カインが言つと、彼女はベッドから起き上がり後片付けを再開した。

2・山賊

カインが目を覚まして一週間がたつた。

この一週間の間にルナがよくカインのところにきて世話をしたりして、いろいろなことを教えてくれた。それと同時に、村の人たちからイロイロな手伝いが舞い込んできた。

元々、若い男が少なく過疎が進んでいたのもあつたが、カインの人懐っこさが特に年を取った人達に喜ばれた。

「カイン君、この野菜を納屋に置いてくれるかね」

カインは自分の家に帰ろうとした時に村のおばさんから今日一度目かの頼まれ事をされた。

「わかりました。納屋ですね」

「いつもすまないね。カイン君」

嬉しそうに野菜を渡すおばさんに、苦笑いを浮かべ受け取るカイン。

はあ、またか。今日はやけに頼みごとが多いな。

そんなことを思いながらもカインは野菜を村のはずれにある納屋に置くと、

カン カン カン

突然に鐘の音が響いた。

カインは納屋から飛び出す。

ちょうどそこにルナがいた。

「何があつたの？」

と聞くと、

「カイン、早く家に入つて鍵を閉めて。もうすぐ山賊が来るの」

そう言つと、ルナは走つて家に入つてしまつた。

カインは自分の家に入り、鍵を掛ける。

しづらべあると、馬のひづめの音と、

「おめえら、食料と女だ。もし逆らひやつあいりや、ぶつた切つて
かまわねえ」

山賊と思える罵声が村中に響いた。

バンバンと木を叩く音や、へし折る音、そして、村人たちの悲鳴
がいやでもカインの耳に入ってきた。

カインは思わず、耳をふたき山賊たちがいなくなるのを待つてい
た。

カン カン カン

再び鐘の音が鳴り響き、ようやくカインは鍵を開けて、外に出て
ルナを探した。

しかし、いくら探してもルナの姿が見えない。仕方なしにルナの
家を訪ねてみるとこにした。

「え？」

ルナの家に着くとカインは驚いた。

それは、ドアが原形を留めないほどに壊れていた。

カインは家の中に入ると、さつき、野菜の事を頼まれた時に出会つたおばさんが倒れていた。

もう、このおばさんがルナの母親だったのだ。

「おばさん」

カインはルナの母親に呼びかける。

息がいまにも止まりそうなほど小さかった。

「ル……たす……て」

「え？ なんて？」

カインは口元に耳を当て、一度聞いてみる。

「ルナを助けて」

今度ははつきりと聞こえた。

「わかった。助けるよ。助けるか……おばさん？」

力なく目をつむるルナの母親を見つめるカイン。

何分、いや、何時間かして、ようやくカインは立ち上がり、カインはおばさんを抱き上げ、遺体が集まる塚にそっと置く。

きっと、ルナを助けるから。

おばさんの亡骸を前に心に深く誓うカインだった。

カインはすぐ行動を起こした。

最初にカインは山賊がいる情報を得るために、物見小屋に向かった。

物見小屋は村の入り口にあり、村の中で一番高い建物だった。それに、この小屋にいる人は村長に次いで物知りなため向かつたのだつた。

しかし、その時は村人全員が無謀なことだと思っていたので門前払いをされた。

カインは何度も何度も物見小屋に訪れては厄介払いされたが、物見小屋の主人がようやく折ってくれて、

「わかったよ。お前には負けた。山賊はあの山の麓にある洞窟を根

城としているらしい。だがそこに行くまで馬を使わなきゃ相当きついと思うぞ」

「大丈夫です。ありがとうございます」

深々と頭を下げ、その場を後にしようとすると、

「おい、カイン」

主人に呼び止められ、振り向くと、

「山賊に立ち向かうならこれを貸してやる」

そう言って、主人はひと振りの剣を渡された。

もう一度、お礼のためにお辞儀をして、今度こそその場を後にした。

次に、カインは登山のために食材や登山に必要な道具を村中からかき集めようとしたが、やはり、無謀なことだと思われていたため、何回も断っていたが、必死に何度も頼まれていた数人の村の人々が、集めてくれた。

「皆、ありがとうございます」

その日、山賊の根城に向かうため手製のリュックを肩にかけ、村

の人に頭を下げる。

そして、村を後にした。

3・行動

村を出て半日、ようやく半分ほど進んでいた。

普段腰につけていない剣をぶら下げるのみで歩くのに不便のはずなのにも関わらず、カインの足取りは普段より軽く思えた。

途中、何かの気配がし、物陰に隠れるが動物の気配だった。

日が暮れ始めた頃。カインはテントを張った。

四分の二ほど歩き、空が暗くなり始めここでキャンプの準備をしながら、

まさか、記憶のない自分がこんな事するなんて、自分でもびっくりだ。

今さらながら少しおいながらも、田の前の焚火にまきを加える。

「さて、と」

カインは土をかぶせ火を消すとテントに入る。

しかし、どうにもルナの事が気になつて、眠れなかつた。

今日だけでは無い。ルナが連れ泊えられてからすと眠れなかつたのだ。

* * * * *

ルナは洞窟の奥にある牢獄に閉じ込められていた。

湿氣の強い洞窟で汗がにじみ出る中、一つの希望を元に今に至るのだ。

きっと誰か助けにきてくれるという暗示に近いものだつただが、ルナにとつてはこのことは心強い希望だつた。

でも、この希望もかなわないことは心の奥底ではルナにはわかつていた。

誰も助けには来ないと。

だから今でも、いつも牢獄の隅でつずくまゐる」としかできなかつた。

いつもの用に配膳口からパンと水が置かれるが、動く」とさえまなりなかつた。

もはや心身共に衰弱しきつていた。

「誰か助けて」

呟くよひにルナは虚空を見つめた。

* * * * *

どうにも眠れなかつたカインは早々にテントをしまいこみ、先に進むことにした。

しばらく進むと、どこからともなく、遠吠えが響きわたつた。

「犬？ いや、オオカミか

咳きながらも腰の剣に手をかけ、先に進むが、すぐにオオカミの群れに囲まれてしまった。

「グルルルルル」

オオカミの喉から発せられる唸りが鼓膜を揺らす。

カインはまだ剣を抜かず狼たちを睨みつける。それはまるで歴戦の戦士のような眼差しだった。

オオカミとカインのにらみ合いが続き、とうとう痺れを切らしたオオカミの一匹が飛びかかる。それに続くように一斉に飛びかかるとする。

カインは紙一重でバックステップでかわし、着地したと同時に剣を抜き、オオカミに向かって横になぎ払った。

三匹のオオカミは喉や胴体に獲物に捕らえられ肉を切った。

それを見ていたオオカミの群れは散るように逃げて行った。

オオカミの血を草で拭い、獲物をしまい、ため息をつく。

まだ山に入っていないはずなのに、こんな場所にオオカミがいるなんて。それに、勝手に体が反応した?

カインは考えを巡らせながらも先に進む。

4・山賊とルナ

匂過ぎにようやく洞窟を田の前に深呼吸して、心を整える。

落ち着け、まだルナが助かるかもしれないんだ。行くしかないんだ。

自己暗示をかけるように、自分にきかせる。

よし、決行は今夜だ。

* * * * *

何度もになるだろかいつものようにパンと水だけの飯を見つめるルナ。

だめ、何が入っているかわからない。今までアレで凌いでいたんだから大丈夫。

アレとは洞窟から滴り落ちる清水だった。今まで彼女はその水だけ今まで凌いできていのだが、パンが気になつて仕方がなかつた。誘惑と理性の葛藤。それは、まるで天使と悪魔の対決だった。

だめ、我慢しなきゃ。でも……

* * * * *

ルナが囚われている牢獄の外では一人の山賊は賭けをしていた。

それは『彼女がいつまでパンを食べるか』だった。パンの中にはルナの思つてている通り、特殊な薬が入つていた。

薬を飲むと確実に依存症となつてしまい、精霊術や治癒術使わない限り、どんなことでも言いなりなつてしまつわゆる魔薬だった。

「彼女、そろそろ持たないんじやないか？」

山賊の一人は今か今かと待ちわびていた。

「明日になりや俺の勝ちだけどな」

嬉しそうに言つて、一人してニヤニヤしていた。

* * * * *

田が完全に落ち、カインは行動を起こした。

カインは正々堂々と正面から入ると、

「なんだ？ お前は！？」

見張りの山賊は問うが、

「お前に~~言つ~~義理はない。それより彼女はどうだ？」

殺氣をギリギリまで落としたカインは逆に聞くが、

「ふつ、誰が言つものか

そう言いながら、剣を抜く、

「そうか」

カインも剣を抜く。

山賊はカインに向かつて剣を振りかざす。

キィイイン

カインは下から上へ切り上げ山賊の剣を飛ばした。

剣は弧を描きながら森へと消えていった。

「勝負あつたな」

そう言いながら喉元に剣先を突きつける。

「だ、誰が言うか」

更に喉元に剣先を突き付け山賊の首から一筋の血が流れる。

「くっ、分かつた。言つ。女なら一番奥の部屋だ。ウツ」

剣の柄で山賊にみぞうちをし、氣絶させた。

やっぱり、体が反応している。それにオオカミの時もそうだったけど、何で剣の技術がこんなに高いんだろうか？　でも、これはこれでありがたい氣もするな。

そんなことを思いながらカインは山賊を岩の影に隠し、洞窟の奥に入つていった。

中に入ると、たいまつ松明の明かりだけで薄暗く、所々ツララのような苔肌の先端から水が滴り落ちていた。

歩くたびに音が反響しつゝ何が起きるかわからない感じがより一層恐怖を誘う。

しばらく歩き続けると狭かつた道が開け、食堂らしき場所に出た。なぜ食堂みたいなと五メートル程の机が三つ並んでいてカウンター テーブルも置いてあつたからだつた

奥に一人、酒瓶を片手にくつろいでいる山賊がカインに気づく。

「あん？ あんた誰？」

カインがしまい忘れていた剣を見てただ事でない事を察知した山賊B（カインが勝手に命名）は酒瓶を投げ捨てナイフを一振り抜く。ぴくりとも動かないカイン。

「なんだ？ こいつは」

異様な空に包まれ思わず本音がこぼれる山賊B。

静かに剣を構えるカイン。

「スカしやがつて」

山賊Bはカインの懷^{ふとい}に入り込もうとするが、カインは剣を垂直に三度突く。

一発目、一発目は避けられたが二発目は交わすことが出来ず、山賊Bの肩に当たった。

「くつ」

使えなくなつた腕からナイフが落ちて地面に刺さる。ナイフを持ったまま肩を抑える山賊Bは一旦引こうと、バックステップをする。しかし、それを狙つていたかのようにカインは一瞬で間合いに入り、首筋に刃を向けた。

「勝負あつたな」

「た、助けてくれ~」

カインは剣を大きく振りかぶり山賊Bの首を跳ねた。

返り血がカイン顔にかかつたがその辺にあつた布でぬぐう。

騒動を聞いた山賊達の足音が洞窟の奥から響き渡るのを確認しながら

らも奥に進む。

不思議だ。やっぱり記憶を失う前に何か関係しているのか？

カインは自分が冷静なことに驚きつつも、雑魚雜魚の山賊をなぎ倒したり、気絶させたり、五体不満足にしたりと、取りあえず再起不能にしていった。

さりに奥に進むとわづきの大広間まではいかないまでもそれなりに大きい空間に出た。

「よく来たね。私の部下が失礼なことをしてすまなかつたね」

奥から出てきたいかにも無精髪に前歯が一本抜け、今にもセクハラしそうな感じの男が出てきた。

「お前が山賊山賊のカシラか？」

カインは剣に手をかける。

「そうだが、そう焦るな。是非私の右腕として働いてもらいたい。なに悪いようにはしない。君にも彼女にもな」

不適な笑みを浮かべるカシラに

「戯言戯言を。寝言は寝てからいえ、阿呆阿呆」

罵声をあげながら中指をたてる。いわゆる『死ね』のサイン。そして、剣を抜き構える。しかし、カシラは相変わらず不適な笑みを浮かべていた。

「寝言か。ふつ、確かにそうだな。では田を覚まさうではないか。なあ、そう思うだろ。ルナ」

「ハイ」

カシラの後ろからルナが現れ、カインは驚いた。

綺麗なエメラルド色だったはずの田はくすみ、まるで生気が感じられなく足元もふらついていた。

「ルナ」

「ルナ、君の友達まだ寝てているみたいだから起こしてあげなさい」

優しく言うカシラはルナのナイフを渡す。

「ハイ」

力無く答えるルナは今までふらついていた足が急に俊敏になり、カインに襲いかかってきた。

キン

カインは咄嗟に剣で防ぐ。

ナイフの方が次の攻撃が早いために剣で受け止めるのがやっとだつた。

くせつ、あんにやろ。ルナに何をしゃがつたんだ？

キン ガキン

受け止めながら必死に見極める。

ルナに勢いで攻められるカイン。

ふとある事に気付いた。

泣いている？

そうルナの目から水滴がカインの頬につたつていた。

キイン

「ルナに何をした」

カインはルナの攻撃を受け止めながらカシラに問う。

「部下が間違えて薬の入ったパンをやつてしまつたのだよ。すまんな」

未だに笑みをこぼさないカシラ。

キィイイン

カインはルナの所に駆け出しナイフを持っている方の手首を掴み、

「ごめん、ルナ」

腹部にパンチを食らわせる。

ルナは動きを止めその場に倒れそつになつたのを抱きかかえ、隅に寝かす。

「ゆつくり休んで、終わつたら村に帰ろ」

優しく語りかけるカインにルナは意識があるのか無意識なのかは分からなかつたが頷いてくれた。

「許さねえ。許さねえよおっさん！！」

立ち上がったカインは、とうとう怒りが爆発した。

「じゃあ、死ね」

カシラが剣を抜く。

カインは目をつむり、剣を横にして刃の縁に手をかけ、「我、四精霊の束ねしバハムートの契約のもと、今、火精霊サラマンダーの力を見せん。」

カインはいい終え、

「フレイムソード！」

刃に手をかけていた方から炎が立ち上る。

「何だと、お前は精霊騎士か？」

カシラは驚きのあまり、剣を落としてしまった。

「業火に燃えよ」

カインはそう言いながら一気間合いを詰め、

「はああああ」

剣を屈ぎ払い文字通り一刀両断した。

「ギヤアアアア」

カシラが黒こげになり倒れる。

騒ぎを聞いてやつて来た山賊一味は、

「か、カシラ！」

「お前らもコイツみたいになりたいか？」

カシラがやられた驚きとカインの冷徹な目に恐怖を覚え、我先に
といふかんじに逃げていった。

炎に包まれた剣を消すように降り剣を納め、ルナに近づき、胸の
辺りに手をあて、

「キュア」

手から発せられた水色の光は彼女の体を包み込みやがて溶けるよ
うに消えていった。

「あ、りが、と」

ルナは一言言づと眠りに着いてしまった。

カインは他に捕まっている人がいない確認しに一番奥まで見に行つ
た。

「誰もいないか」

カインは一人咳き彼女のいる場所まで引き返した。

ルナをだきかかえ洞窟をでて、昼間の内に見付けておいた馬に彼女を乗せ村に向かつて駆け出すのだった。

「カインが戻ってきたぞ」

物見小屋の主人が村人達の聞こえるように叫んだ。

「カインが？」見て！ルナちゃんも一緒に！」

村の一人が叫んだ。

カインは馬を村の中に入れすぐに、

「彼女を早く医者に見せてください。かなり危険です」

カインはそう言いながら馬から降りようとするが、降りたとたんバランスを崩しその場に倒れ込んでしまった。

「あれ？ 倒れちゃつた」

苦笑いを浮かべながら立ち上がろうとするがまたもやバランスを崩し誰かに支えて貰えないと歩けないほどだった。

「大丈夫かい？ カイン君も医者に見せた方がいいんじゃない？」

村の一人が心配そうに言うが、

「大丈夫です。疲れが今になつて出てきただけですので、少し寝れば治りますから」

そう言うとカインは村の人の肩を借りて自分の家に向かいベッドで横になると直ぐに睡魔が襲い眠りに落ちてしまった。

6・お見舞い（前書き）

更新遅れてごめんなさい。
ついあえず更新します。

6・お見舞い

カインは夢を見ていた。

カインに似た少年が城の中でライオンのような大男と木剣を交えていた。

カアアン ガツ カン

少年は何度もその男に向かって木剣を当てようとしたが、大男は一歩も動かさずに防いでいた。

「どうした、ヴァン？ そんなもんじやないだろ？ もっと冷静に考える。そんなんじやすぐ死ぬぞ」

大男は少年をヴァンと呼び指摘する。

「わかつています」

ヴァンは木剣を構えなおし、深呼吸をした。

相手がどう動くか予測して素早く切る。

ヴァンは大男に向かつて地面を蹴る。

さつきと変わらない攻防が続くが、何かが変わっていた。

じじつ、笑つてやがるよ。

ヴァンは一旦、後ろに下がりながら腹部を狙おうとするが、予想通りふさがれた。

ヴァンはそれを好機とみなしていた。

下がつたのは大男の油断を誘つためだつたのだ。

ヴァンは一步下がつて片足が地面に着くと同時に地面を蹴り大男に体当たりをするように突きを加える。

が、大男はヴァンの木剣を防ぐためはじじつとする。

ヴァンはどつさの判断で木剣が当たる瞬間一瞬引きそのまま体当たりをした。

「いい剣筋だ。が、このままではお前が戦場に出た瞬間に殺される

ぞ」

大男は鋭い視線でヴァンを見る。

ヴァンは剣をしまい大男に一礼をした。

カインは眼をさまし

「ん~。よく寝たな」

カインは心地良いくらいに大きな伸びをした。

ちょうどその時、初老の白衣を来た男が入ってきた。この人は村で医者にして学校の先生であるホビーさんが訪ねてきた。

「目が覚めたようだね」

ホビーさんは優しそうな笑みを浮かべた。

「どれくらい眠っていたのですか?」

ベッドから上半身を起こして聞く。

「三日だよ」

ホビーさんは、そう言いながら黒い鞄を机の上に置き、中から聴診器を出した。

カインは上着軽くあげると、ホビーさんは聴診器を彼の胸にて
音を聞く。

「うん。 大丈夫みたいだね」

聴診器をしまい、今度は薬の入った紙袋をカインに渡した。

「これは？」

不思議そうに薬を見るカインに、

「大丈夫だつていつても。まだ安心はできないからね。栄養剤だよ」

「それじゃあ、お大事に」

ホビーさんは鞄を持ってドアまで歩き始め、ノブに手をかけよう
としたが、思い出したように振り向き、

「あつ、そうそう。ルナが君の事待つているよ」

「わかりました」

カインは頭を下げた。

カインは服を着替え、ルナのところに向かった。

「ン ノン

ドアをノックする。

「どなた?」

ドアの奥からルナの声がした。

「カインだよ。入るね」

カインは中に入ると、ルナはベッドに座っていた。

「よかつた。元気そうで」

ホツと胸を撫でおろし、ルナの横に座る。

「あの、この間はありがとうございました」

ルナは照れているのか顔を赤らめていた。

カインは優しく微笑みながら、頷く。

「ねえ、聞いていい?」

「なに?」

彼女はカインと向き合つようと座り、

「カイン、あなた魔法をつかえるの？」

「え？」

カインの頭に『？』がいくつも並んだ。

「だつて、助けてくれたとき魔法使つていたような気がしたし、それ……私の体を直してくれた」

「あつ

カインは思い出した。

あの時カインは怒り爆発し、思わず行動していたのだ。

「あの時は、頭に浮かび上がったんだ」

「そりなんだ。てっきり記憶が戻ったのかと思つて」

ルナはがっかりしたような顔をした。

「そりいえば、精靈騎士つて何？」

「精靈騎士？ どこからそれを？」

ルナは驚いた顔をした。

「あの山賊のカシラが言つていたんだ」

「そりなんだ。……精靈騎士というのは、こじアースの精靈の力を

使った魔法と剣術に優れた人を指す言葉よ。バハニアにはそういう人を集めた精鋭部隊がいると聞いたわ」

彼女はベッドから一枚の写真を出した。

その写真は小さい女の子と男女だった。

「この人は私のお父さん。傭、バハニアの兵士だったんだけど。今は行方不明なの」

「じめん。なんか変なこと聞いちやつて」

暗い空気が部屋を満たし始め、一人とも黙ってしまった。

「そ、それじゃあ、俺、帰るね」

「ウン。ありがとう」

それを聞いてホッとしたような表情をして、その場を後にした。

7・村長の所へ

ルナの所にお見舞いに行つた翌日、カインは一人、ある決心をして、村長の家に向かつっていた。

コン コン

ドアをノックすると、白い眉を田で隠し、長い白髪の老人の顔だけが出てきた。

「村長。 少しお話があります」

カインは軽く会釈する。

「まあ入りなさい」

村長はドアを完全に開いて、カインを中に入れだ。

「失礼します」

カインは家の中に入ると、驚いた。

家の壁にほととじが本棚で埋め尽くされ、入りきらないほどの本があった。

まるで図書館だな

そう思いながらもカインはあたりを見渡しながら奥に進む。

「あい、話とは何かな？」

村長はこの村では珍しい革製のソファーに座る。

カインは相向かいの長いソファーにすわる。

「実は俺、この村を出ようと思つてゐるんです

思わず前のめりなつていた。

カインはルナを助けてから、いや、その前からずっと考えていたことをありのままの事を話し始めた。

「俺はずっと村のみんなに助けられていました。でも、未だに記憶の一つも思い出せない。それがどうしても俺には耐えられないんです」

「これでもかとこうくらこに前のめりなる。

「わかった。君にはまだいてくれたれていた方よいと思つていたが、カイン君がそう言つのであればそれもよいだろ。しかし、武器を持たずには村の外に出るのは危険だ。それに金もほとんどないだろ」「確かにこの間のように武器を持たないで村の外に出るのは、危険すぎること」はカインにはわかつていた。

それでも、村の外にカインの記憶の手がかりがあることに理由は分からぬがカインには確信を持つていた。

「わかつています。それでも俺は行きたいのです。たとえ危険な目にあつたその時の覚悟はできていますから」

村長はまたもや髪を撫で何かを考えていたが、おもむろに立ち上がり、部屋の隅にあつた本棚の方へ向かつた。

そしてある段の本を取り出し、別の段に入れると本棚が床に吸い込まれて行つた。

「それは？」

本棚の後ろには鞘に綺麗な装飾が施された剣が壁にはまつていた。

村長は笑みを浮かべ、

「この鞘は渡せないが剣と多様のお金は君に貸そ。いつでもいいから返しに来なさい」

そういういつてさやから剣を豪華なさやから黒い革製の鞘に入れな

おしカインの前にある机に置きその横に金が入った袋を置いた。

「いえ、私はそのためにきたわけでは無いのですから」

カインは村長の方に渡す。

「いや、それでは困る。せめて、お守り代わりに持ていなさい」

村長もカインに渡す。

そう言つやり取りが堂々めぐりになり延々三十分は続いていた。

「わかりました。受け取ります」

カインはようやく折れて、受け取り深くお辞儀をした。

村長も嬉しそうに笑い、つられてカインも笑つてしまっていた。

改めて剣を引き抜いてみる。

柄は籠模様になつていて、刃は竜の模様が彫り込まれていた。

「改めて見ると良い剣ですね」

「ホツホツホ。いい眼をしておりますな。この剣は、ワシが若いころ、城に仕えている時にもらつたのだよ。そもそもワシが城についていたのはだな」

村長の昔の話が延々と続き、カインは眠り一度ほど眠りに落ちていた。

終わったころにはもう既に日が完全に落ち家には明かりが灯っていた。

村長の話、長すぎだよ。

そつ、見ながらも家路につくのだった。

～数日後～

ルナの完治の知らせを聞いた翌日。村を出るため伸びきった髪をナイフで切り落とし、田が昇る前に村を出ようと村の入口に向かっていた。

「ルナ、みんな。今までありがとう。そして、さよなら」
カインはマントを翻し、村を後にしようとしたとき、

「待つて～」

誰かがカインを呼び止められ、振り向いた。

「カイン。あなた一人で旅に出るつもり？」

近づいてきて、ようやくルナだということがわかった。
いつも、髪を縛つていなかつたのだが、今見ると髪をリボンで縛りポニーテールにしていた。

「ルナ。お前、まさか一緒についてくるつもりじゃ」

「一人で行くなんてするいじやない」

ルナは頬を膨らましになり、思わず笑ってしまうカイン。

「アッ、笑つたな」

カインの胸を叩くルナ。

微笑ましい姿にカインの頬が緩んでしまう。

「全くだよ。あいさつなしで行つちゃたら私たちも困るよ」
村のおばさんがいつの間にか居た。しかも一人だけでは無い。村の人全員がカインの見送りに来ていたのだ。

「みんな」

ちょうど日が昇り、村の人たちの笑みが見て取れた。

「みんな、ありがと」

深々と頭を下げる。

村長がカインのすぐ近くに来て、

「精靈王バハムートの加護がありますよつと」

「村の皆さんも加護がありますよつと」

カインもお礼をこめて言つと、村を後にした。もちろんルナもつれて。

「そういえば、カイン。次に行くところつてあるの?..」
しばらく歩いていると、ルナが不意に聞いてきた。

「アツそういえば」

カインは村を出ることばかり考えていたので次に行くところはまつたく考えていなかつた。

「そんなことだと思ったわ。とりあえず、消耗品の継ぎ足しとかいろいろ必要だから、この先に少し大きな町があるわ」
予想通りというのが顔に出でいた。

カインは頷き次に行く町が決まり、先に進もうとするが、
「あれつて何?..」

ルナは立ち止まり指を差した。

カインは差した先を見ると鶏のような真つ赤な鶏冠と紺色の羽の
生えた鳥がいた。

「トカトリスだ」

「え?..」

思わず口走るカインに驚きを見せるルナ。

何で、知ってるんだ?

「カイン、あれ、トカトリスだつて、襲つてくる?..」

ルナは護身用にと持つていたナイフに手をかける。

「わからない。でも慎重に越したことはないさ」

カインもまた剣に手をかけトカトリスの横を通り、少し離れた場

所で一気に走りだした。

「こ、怖かつた！」

ルナはへたり込むように地面に座る。

確かに人の半分の身長ほどあるのだから怖いはずだが、カインは不思議と怖さが感じられなかつた。

「お前なら食われてたかもな」

「そんなこと言わないでよ」

「冗談交じりで言つたつもりだつたけども、逆にルナを怖がらせることとなつてしまつた。

「冗談だよ。襲われえたら助けるからさ」

すかさずフオローするが、今更遅いと自分でも思つていたが、パアと明るくなるルナにほつとする。

「うん。頼りにしてる」

その後は何事もなく順調森を抜け町の目の前にまで来ていた。

「あと少しだね」

ルナの顔には疲れが見始めていた。

「そうだね」

カインが気遣いながらルナに言つた瞬間、彼らの頭上に影が覆つた。

一人が見上げると驚愕してしまつた。

空には大きな黒い羽根の持つた鳥が旋回していた。

「まづいな」

カインは苦笑いを浮かべた。

鳥は旋回していくが急上昇をし、一気に一人に向けて襲いかかつてきた。

「危ない！！」

すかさずルナを押し倒し、彼もその場から離れた瞬間黄色い嘴が間を通つた。

「ルナ、木の陰に隠れて」

そう言ってカインは剣を抜いた。

ルナに身を隠すように指示をし、カインは剣を抜く。
再び上昇した鳥は、旋回をして狙いを定めているように見えた。
鳥を睨み付けるように見ていると、襲いかかってくるのがわかり、
握っていた剣に力を込める。

降下してくる鳥は速度を上げながらカインに襲ってくる。
カインは紙一重で倒れるようにかわしながらも剣を羽根に傷をつ
ける事に成功した。

奇声をあげながらも何度も襲いかかろうとする。
が、それをかわしながら羽に傷をつけ、とうとう鳥は崩れるよう
に地面に降り立つ。黒い体毛の中にある鋭い眼光がカインをにらみ
続けるが、それに負けず劣らずカインも鳥に睨みつける。

「クワアアアア」

甲高い雄叫びの跡、体を揺らしながら、カインに襲いかかろうと
する。

カインはまだ動かない。

あと十メートル……五メートル

まだ動かない。

三メートル……二メートル

鳥はカインめがけて嘴でつつこうと襲いかかろうと、振り下ろす。
それを見て、カインはバックステップした。

ドス

力いっぱいに始めたのか、嘴のほとんどが地面にめり込み、なか
なか抜けないようだつた。

カインは一気に近づいて鳥の頭に飛び乗り剣を刺そうとするが、ちょうど抜けたため、勢いよく頭が揺れた。

カインは鳥の頭上で飛ばされそうなのを片手で鳥の毛をつかみその場をしのいだ。

しかし、鳥はカインをさらに早く振り落とそうとして、首を左右に大きく振る。カインも右往左往しながらしのいでいた。

クソッ、このままでは振り落とされる。

そんな思いが焦りとなり、手に汗が出始め、その汗で手が滑り振り落とされようとした瞬間、頭にあの言葉が浮かんだ。

「我、精靈王バハムートの契約により、風精靈シルフの力今見せん。ウインドウカッター」

飛ばされる寸前に剣を振ると、目で見えるほどの空気が弧を描き見事に鳥に首をとらえ切断した。

カインは飛ばされ地面にたたきつけられるも、うまい具合に受け身をとり剣を支えに立ちあがった。

「カイン」

駆け寄るルナを見て、ピースサインを出しカインは痛みが引いたのか剣をしまい、鳥を見る。

「イツ、なんか、鳥のより、こっちの方がダメージが大きいかも」
呟くように言いながら脇腹を押さえながら、血の海に真中に横たわっている鳥を見つめているいた。

ルナはカインに近いた。

「まったく、無茶しないでよね」

ルナは傷がないかカインの体を調べていると、町の方から馬に乗った兵士が三人こちらに来るのがわかつた。

「兵士だ」
「やうだね」

今さうかよ。

と二人が思つていて、

「大丈夫ですか？」

兵士は何時ものよつて言つて居るかのよつて言つて、ルナはキツとした目をして、

「遅いのよ。もし彼が死んだらどう責任を取つてくれるの？」

兵士たちは彼女の迫力に押されたじろいでしまつた。

「だいたい、なんで今さら来るのよー。まるで終わつたから来たみたいじやない」

一步どころか五歩ほど後に下がつてしまつ兵士に、

「ルナ、やめとけ。彼等は悪くないよ」

ルナを落ち着かせるために肩を叩いた。兵士たちもうとつんと頷くが、カインは彼らを睨みつけると、

「お前ら見でみるとまだ入隊して間もないな」

カインは兵士たちをにらみ続ける。

「は、ハイ」

カインの威圧的な目に思わず直立になる三人。

「それじゃ、町まで、案内してもらえるかな？」

「は？」

「え？」

急に柔らかい目になつて言つので、三人とルナは間の抜けた声を出してしまつた。

水路が縦横無尽に流れる町、ウォータースクウェア

カイン達は兵士の案内で町の宿の代金を払いメインストリートに出ていた。

「ルナ。確かにナイフだけだったよね」

確かにルナはナイフを持っていた。しかも簡単に壊れてしまいそうなほど簡単なつくりのナイフだった。

「ええ、でもこれは昔から大切にしているものだから。売らないわよ

どうやら売られると思つたらしいルナは誰にも取られない用にしていた。

それを見たカインは、

「売りはしないよ。ただそれだけじゃちょっと心細いからさ」

カインはそう言って、店に入った。

「ルナは、えーと

改めてルナを見ると、とても可愛らしい顔立ちだったことに今更気付くカインだった。

不思議そうに首を傾げるルナを見て一瞬忘れてた目的を思い出し、

「うん、ルナはこれとこれかな」

そう言って見せたのは頑丈なナイフと弓矢を渡した。

「これって？」

ナイフはともかく、なぜ弓矢なのか不思議に思うルナは首をかしげる。

「これは、ただの勘だよ」

カインは本当に勘でこの二つを選んだのだ。その後、カインは彼女の武器と、予備の服を買い、店を出て必要な食材等を買い宿に戻

つた。

カインとルナは別の部屋で一人考へながらカップに入っていた紅茶を一口飲む。

瞬間、ドラゴン、城壁、王のような姿が見えた。

「なんだつたんだ今のは？」

フラッシュバックのように頭に映像が浮かび上がってきたのだ。もう一度、思い出そうとするが頭が急に痛くなりカップに入っていたものを零してしまった。

痛みを耐えながら思い出そうとする意識を失つた。

霧に包まれた荒れ地に少年が一人、体中のいたるところに火傷や切り傷があつたが、それを耐えながら剣を構え、神経を研ぎ澄ましていた。

突然、どこからともなく異様な鳴き声が少年の耳に届くが、微動だにしなかつた。

背後からの異様な生物が少年に向かつて襲いかかつてくる。

異様な生物は、トカゲのような肌に羽を二対もち、その姿はドラゴンのようにも見えた。

少年は襲いかかつてくる異様な生物に飛び乗る。

驚いた異様な生物は少年を落とそうと上へ下へと飛ぶが、少年は羽をつかみ耐えしのぐ。

怒りをあらわにした異様な生物はさつきと同じような鳴き声を出し反転し少年を地面にたたきつけようとする。

少年はギリギリで地面にたたきつけられるのはまのがれたが、突起状の岩に激突した。

少年は吐血をしながらも立ち上がり再び立ち上がるうとした瞬間目の前に大きく赤い口が目の前にあらわれるのだった。

カインはハツとして田を覚ました。

なんだつたんだ今夢は妙にリアルだつたよつなそれにあの少年つてもしかして

コン コン

ノックする音に考えるのを止め、

「開いてるよ」

優しく言うカインにドアを開き遠慮がちに入つてきた。

「どうした？ ルナ？」

とりあえず零したまだ温かい紅茶を拭いていた。どうやら意識を失つたのはほんの数分らしかつた。

無言のままベッドに座る。

「どうした、ルナ？」

もう一度、聞いてみると、

「外を見て」

不思議に思いながらもカーテンから外を覗いて見る。

外には何人にも兵士が宿の前に立つていた。

「いつたいにがあつたんだ？」

とカインが言った瞬間、ドアを蹴破り兵士が雪崩のように部屋を埋め尽くした。

詰所の一室に連れてこられた。その部屋の中央に机と椅子が三脚あるだけの質素だった。一言で言つと尋問室のような感じがした。ルナたちが座ると、すぐに筋肉隆々の男が怖い顔をしながら入ってきて、向き合つように座ると、

「ここで、何をしてた？」

「いきなり、何を言つているんですか？」

「いきなり詰所に連れてこられて、困惑する一人を見て、

「ここで、何をしているの聞いてるんだ！」

「え？ 今日はただの旅の補充をしただけです」

怒鳴り声に思わず声のトーンが小さくなるカイン。

「ウソを付くな！ お前が帝国の手先だつてことは分かつていいんだ」

「帝国？」

ルナは凍りついた。

「僕たちは隣の小さな村から来たんですよ。帝国のわけがないじゃないですか？」

カインは男を睨みつける。

バンツ

勢いよくドアが開いたのでその部屋に居た全員が飛びあがつた。

「隊長。商業区で魔物が暴れています」

下つ端と思われる兵士が息を切らしながら部屋に入ってきた。

「なに？」

「この人、隊長だつたんだ。

カインはただの筋肉バカだと思つていたのでこれには驚いたといふか何とも言えない気持ちになつた。

「そうか。おいこいつを牢屋にぶち込んで…」

「ハツ」

兵士は敬礼すると手枷を一人につけ、部屋を出て行つた。

「あとでじつくりいたぶつてやるからな。ふふふ、フフハハハハハ
ガツ、一あがはぐえは（あごが外れた）」

懸命に顎を直そつとしながら部屋を出て行つてしまつた。

「あ、あの～」

ルナは遠慮がちに言つと今さつさまで息を切らしていした兵士が我に帰つたように、

「あつ、すいません」

なぜに謝る？

不思議そうに思いながらも何度も『スマセン』という兵士にだんだんおかしくなつてくるのを必死こらえながらも手枷をつけられ地下の牢屋へと連れて行つてもらつた。

「スマセン。少しの間待つていて下さー」

何度もかになる『スマセン』に耐えつつ、

「一つ聞いていいですか？」

カインは地下室から出て行つとする兵士を呼び止めた。

「何、少年？」

「少年つて…まあいいや。最近帝国が何かしたんですか？」

兵士は啞然としていた。

「なんか、何か聞いたやまづかつたかな

ルナに聞いて見るが、こつちはこつちで半分パニッシュに落ちついて、

「何で、こんな所にいるだけ、あ～もうわからん。どうじょううなどと激しく喜怒哀楽がぐるぐると回つていて、

「何で、こんな所にいるだけ、あ～もうわからん。どうじょうう

「まあ～、で、どうなんですか？」

ため息をつきもう一度、兵士を見るがいまだに開いた口がふさがつていなかつたので鉄の柵越しに口を思いつくり閉めた。

「オホン。こめんこめん、一二三週間くらい前にあのハハアが帝國の手に落ちたんだ」

え！？

今までパニックに落ちていたルナは驚きのあまり我にかえった。

「あのバニアアが落ちたってどういうことですか？」

彼女は兵士のむなぐらをつかみ前後にゆする。

兵士はそれに詫問せらるゝつゝに顎がぐいぐいとゆられて、だんだん

と顔から血の氣が失せて行く

「アーリーはアーリー？」

カインが言う。

「何でも、奇襲にあつて、国王と精靈騎士は全滅という話だ。これじゃ、他の国で先だい警備を強化してゐつて話だ」

煙草を吸おうとポケットから取出そうとする瞬間、どこからともな

く地響きが部屋を揺らした。

煙草に火をつけようとした瞬間、地響きとともに地下室は揺れる。

「な、何だ？」

兵士は思わず煙草を落としてしまう。

タバコが床に落ちた瞬間、天井の石が瓦礫となつて兵士の前に落ちてきた。

「うわっ」

兵士は思わず尻もちをついてた、瓦礫は牢屋の柵にぶつかり兵士の数センチ前に落ちてきたので難を逃れた。

「いつたい、何が起きている？」

ルナはカインの所に近寄り、瞬間、また地響きと共に瓦礫が崩れルナに襲いかかる。

「ルナ！！」

カインはルナを押し飛ばす。瓦礫は今度はカインに襲いかかろうとすが、なぜか瓦礫はカインには当たらなかつた。

ホツとしたルナは足の力抜けへたり込んでしまつた。

「大丈夫？」

カインは服についたほこりを払いながらルナに近づいて聞くと、「大丈夫？　じゃないわよ。一歩間違えればあなたしんどたかもしれないのよ」

へたり込んだままの格好で言つが、不意に顔を俯かせ、「でも……ありがとう」

カインは微笑みながら、ルナの手を握り、立ち上がらせる。瓦礫の山を横切りながら、グニヤリと曲がった牢屋の柵の間を通り抜け放心状態の兵士を尻目に地下室を後にした。

地下室を出ると、暗くなり始めた空が見え、一気に地上に向かつて走り出す。

地上に出た時、二人は驚いた。詰め所は壊滅的被害にあつていたんだ。

それだけでは無い、数時間前の町のほとんどが壊されいたるところに火事が起きていた。石造りの道は荒れ果て地肌がところどころ見えていた。

「何あれ？」

ルナが指を差した先には巨大な生物が動いていた。

薄暗いがカメのような胴体に尻尾が蛇のように無数に動いていた。

「タートネックだ」

カインは思わず呟く。

「え？ もしかして、思い出したの？」

「わからない。でも、あいつはルナの武器じゃ歯が立たない。そこで待っていてくれ」

カインはそう言つと、地下室に置いてあつた自分の剣を抜き、タートネックがいる広場の方へ走つて行つた。

カインが広場につくと、さつきまで尋問といつか詰問をしていた隊長と数人の隊員のみだけがタートネックと戦闘をしていた。

カインはあたりを見渡す。綺麗な石畳だったところはやはり、所々くぼみができていて、いたるところに再起不能となつていていた兵士が倒れていた。

「加勢します」

カインは隊長のところに向かい、剣を抜く。

「なんだお前は！？ どうやって抜け出してきた」

隊長は驚いていたが、タートネックから田を離さないでいた。

「さすが、隊長だ。敵を見据えたままだ。

カインは感心しながら、

「そんのは後です。今は目の前の敵を倒しましょう

カインは手に力を込める。

納得のいかないような顔をする隊長だが、

「仕方あるまい。これ以上、町を破壊されるのは御免だからな」

隊長とカインは目を一瞬合わせ同時に仕掛ける。

隊長は首元に剣を振るうが尻尾の一部にはじき出される。

カインはとすると後ろに回り込み尻尾の根元に切り込もうとするが、タートネックは少し横に動きタートネックの甲羅にあたりやはりはじき返されてしまう。

体長五メートルは高さ二メートルあるタートネックには硬い甲羅と皮膚に守られまさに鉄壁と言つべき魔物だ。唯一の弱点は小浦の裏だけでひっくり返すにも大の大人が十人かかつてもひっくり返ら

ないといつほど重たいのだ。

「くそ、皮膚が思った以上に固い。今までの精霊術で切ることができなくなるにいけど、自分自身の容量^{キャパ}がどれくらいかわからないし、どうすりやいいんだ」

カインは息を切らしながらもタートネックを見る。その時、カインは広場の中央にある噴水を見て頭の中で何かが開いた。うまい具合にタートネックの尻尾攻撃を回避しながら隊長の元に向かつた。

「隊長。兵士をいったん下がらせて下さい」

「なぜだ？」

隊長は不機嫌そうに言ひ。

「少し考えがあります」

カインはそう言ひと、

「……わかつた」

カインの確信的な言にしぶしぶ承諾した。

「ありがとうございます」

カインは田でお礼をすると、

「全員、やつから一旦、離れる」

隊長の街中に響くような声でいう。

不思議そうに思ひながらも、兵士はタートネックから離れるのを

カインは確認すると、剣をしまい、

「我、四精霊を束ねしバハムートの契約のもと、木精霊ノームの力を今見せん。 アースニードル セット！」

カインは唱え終わると同時に、タートネックの上に無数のドリルのような土の塊が現われ、

「シューート！」

の声に合わせ土の塊はタートネックに襲いかかる。

すべての土の塊はすべて、タートネックの甲羅に突き破り地面を突き刺した。動きを止めたタートネックを見て

「 水精靈ウンデイーネの力を今見せん。 ウォーターアロー！」

噴水からの水がタートネックに向けて細い水の線が一直線にタートネックの頭を射抜こうとする。しかし異常に伸びた尻尾が頭を守り、壁を作るが、それを貫通して頭を突き刺した。

完全に動きを止めたタートネックを見てカインは『ふう』とため息をついた。

カインはルナを連れて兵士の詰め所に戻っていた。

「いや、本当にすまなかつた」

戻るなり、隊長は頭が床に着くくらい低く下げ、許しを被りつとする。

「どうしようかな？ なあ、ルナ」

不敵な笑みを浮かべながらルナに聞くと、一瞬、『えつ』『う』『う』の顔を浮かべたが、すぐに理解し、

「そうね。どうしようかしら」

ルナもつまづ乗つかった。

「本当に、申し訳ございませんでした」

隊長はさうに低く土下座ならぬ、土下寝をしてさうに謝罪をする。カインはこれを持ちよつとやりすぎたしたような気がして、

「じょ、冗談ですよ」

「そ、そうですか。いやあ、面倒の上ない。でも、なぜ早く精霊を呼ばなかつたのですか？ そつすれば、帝国と間違わずに済んだのですけど」

カインは頭の上にハテナが浮かんでいた。

それを見ていたルナが、

「実はですね。彼、少し前の記憶が無くなつてゐるんです」

「そうですか、記憶が」

隊長は氣まずそうな顔をした。

「アツ、でも大丈夫ですよ」

カインは咄嗟に言つ。隊長はカインをなでる。

「何故なでるのですか？」

カインは不思議な顔をすると、

「いやあ、すまない。ついなでてしまつた」

と照れくさそうに言うのだった。

「お、そうだ。このことは一応、ギルドに報告してくれ、どうせすぐ金が無くなるだろうからな」

そう言いながら、紙を渡した。

「ありがとうございます。でも、ギルドって何ですか？」

ルナはその紙を受け取りながら聞くと、

「そうか、ギルドというのはな。簡単に言うと、旅人が集まる金が集めるところかな」

と言いながら、簡単な地図を描き始めルナに渡す。

「ありがとうございます」

カインは頭を下げ、あわててルナも頭を下げた。

破壊された道を歩く一人は、

「早いな。まだそんなに時間が経っていないのに、もう修復工事が始まってるよ」

カインは修復され始めている家や道を眺めながら歩く。

「そうね。露店も出ているし」

確かに露店も出ているし仮の家もできていた。

「えーと確かにこのあたりなんだけど」

メインストリートからかなり離れた道を歩いていた時、ルナは地図を見ながら言う。

「ここじゃないかな」

カインが差した先には古びた看板に『カンパニー』という今に消えそうな文字が書かれていた。その隣には剣が交差され背景にはドラゴンが書かれた新しい看板があつた。

「ここだね」

ルナは地図に書かれた文字と見比べ確信した。

二人はドアを開け、中に入つて行つた。

カンパニーの中はアンティーク風の家具が置かれ、落ち着いた感じがする。

奥にあるカウンターにカイン達は座り、コップを拭いているマスターらしき人に、

「あのースイマセン」

トルナはさつきもらつた紙を渡す。

マスターは無言のまま紙を受け取ると、

「ほう、さつきのやつ倒したのか」

とやつと口を開くが、驚いた様子も見せず、カウンターの下から袋を出した。

「これが報酬だ」

今度はグラスを磨くマスターだった。

「ちょっと待ちなさい」

ギルドから出ようとするマスターがカイン達を呼び止める。

「ガルフォンに向かうのかい」

「そのつもりですけど」

ルナは振り向き答えると、

「これを持って行きなさい」

そう言ってカウンターにバッヂを置いた。

バッジの丸型で中に看板に描かれていたドラゴンを背景にして、剣が交差した絵が描かれていた。

「これは」

カインはマスターに聞くと、

「それを、私の友人に渡してもらいのです。友人はことと同じ名前で店を開いています」

カインはそれを受け取り、

「わかりました。必ず渡します」

「あつ、入る前に必ず身につけておいてください。絶対に」
最後の言葉を強調しながら再びコップを磨き始めた。

不思議に思いながらも店を出て、宿に戻った。

* * * * *

自然豊かな、平原にたたずむ一つの都市があった。

しかし、その都市は数週間、至る所に黒煙が立ち込め、黒煙がなくなる代わりに白煙が昇っている数が増えていった。

都市の中心にある石造りの大きな城の中の玉座に不敵な笑みを浮

かべながら類杖を突く中年の男性がいた。

そこへ、黒い甲冑を着た青年がその男の前で膝を折り、背を低くする。

「奴は見つかつたか?」

「いえ、未だに見つかっておりません。ですが、次の出撃の準備が整いました」

姿勢を低くした青年は言つと、

「そうか。ならば、皇帝陛下に報告せねば」

男は立ち上がり、玉座の間を出て行つた。

男はそのまま、西の塔の最上階にある、小さな部屋に入る。そこに置いてあるのは背の高い机と、小さな鏡が置いてあつた。

男はぶつぶつ何かを唱え始めると、鏡が光だし、深々と頭を下げてから、

「陛下、次の出撃準備が整いました」

「そうか、ならば次の出撃地はウェンティアに進出しよう。我が軍からも二個中隊を預ける」

鏡から聞こえる男の声に、また深々と頭を下げ、

「はつ、ありがたき幸せ」

「幸運を祈る」

そう言つと鏡の光が弱まっていき、男は頭をあげる。その顔はまるで獲物を狙う獣のようだった。

* * * * *

カインとルナは町を出て、この国の首都、ガリフォンに向けて旅を続けた。

「ねえ、カイン」

広い平原にまるでけもの道のように地肌が見える所を歩き続け、ガリフォンまであと半分と来たとき、不意にルナが口を開く。

「何？」

カインはルナの方を向く。

「カインは、もし記憶が戻らなかつたらどうするつもりなの？」

「俺は……わからない」

カインは俯いてしまう。

「そつか。『ごめんね変なこと聞いて』

ルナはいつもと変わらない口調に戻つた。

なんなんだ、一体？

カインは不思議な顔をしながらもルナの跡を追う。

そちらに、半日歩き続け、ようやくガリフォンに到着した。

「一日がかりでやつとたどり着いたよ」

カインは貰つたバッジをつけ、門をくぐる。

「ちょっと待て」

カインは門番の兵士の前を通りつとしたり、その門番が呼び止めた。

15 ガルフォン（後書き）

更新が遅くなってしまって申し訳ありませんでした。 私情により更新が滞ってしまいました。 今年から新社会人になり更新が遅くなることが予想されますのでそこのところは許してください。

宿野部 湊闇

「ちょっと待て」

門番の兵がカイン達を呼び止める。

「なんですか」

カインは内心ドキドキだった。

また詰め所に詰められるのではないかといつ恐怖があつたからだ。

兵士はカインの胸元にあつたバッジを見て驚いた。

「ギルドバッジ!? 失礼しました。どうぞお通り下へこ」

いきなりの態度が変わったので驚いた。

「なんだつたんだろ今のは?」

街中を歩きながら不思議に思つルナ。

「確かにこのバッヂを見て急に変わったな」

カインは胸元のバッヂを見る。

このバッヂは一体何なんだ？

カイン達はウォータースクウェアのギルドから預かつたバッヂを届けにギルドに向かつた。

* * * * *

町の中央にそびえ立つ蒼い城の一一番高い塔の最上階に薄いグリーンのドレスを着た、少女が城下町を双眼鏡でのぞいていた。

「あつ、あの方は」

少女は嬉しそうな声をあげ、侍女に、

「あの方が来ましたわ。お迎えに行ってあげて」

「わかりました」

侍女は深々と頭を下げ、部屋を出て行った。

「やつと、念えるのね」

少女はそう言いながらクローゼットを開き新しいドレスを物色し始めた。

* * * * *

メインストリートから少し外れた路地にギルドそれはあった。そのギルドと兼用になっている店の名はやっぱりカンパニーだった。

カイン達は中に入ると、ウォータースクウェアに居たマスターと瓜二つの人気がいた。

「こりつしゃい」

マスターは優しく出向かてくれた。

「あなた、確かウォータースクウェアに居た人じや」

ルナはカウンターに座るなりそつまつと、

「それは、私の兄です」

「そつですか。あの、その兄から預かつたものがあるんですかど」

カインはポケットにしまつてあつたバッジを取り出しカウンターにおいた。マスターはこのバッジをじっくり眺め、

「これは、私宛てでは無いですね」

マスターはバッジをカインに返し、カインもバッジを改めて眺める。

バッジにはドラゴンと剣、楯の絵しか描かれていて、何の変哲もないものだった。

「それじゃ、誰当てなんですか」

カインはマスターの目を見て言つと、一瞬彼はキヨトンとした顔をしてコップを磨いていた手が止まつたが、すぐに笑顔に戻り、コップを磨き始めた。

「何を言つてゐるんですか、あなたが兄さんに渡しんじょ」

「え？」

カインは驚いて椅子から落ちそうになつた。固定式の回転椅子だつたのでなんとか落ちずに済んだが、

「俺がマスターの兄さんに預けたつて、ビリコツことですか」

「お、落ち着いてください」

カインの勢いにたじろぎながらもマスターは水の入ったコップをカインに渡した。

カインは水を一気に飲み深呼吸した。

「あなたが兄に渡したんです。もし来たらこれを渡してくれあなたが言つたそうです」

マスターはバッジを裏返した。

バッジの裏側には、ヴァン・ペグナーと書かれていて、

「誰の名前ですか？」

カインが聞くと、またもやきょとんした顔になり、

「またまた～、御冗談を。あなたの名前でしょ」

喧嘩スマイルで返した。

カインは名前を見つめながらウォータースクウェアを出る前に買った小型のナイフを取り出し、カウンターの上に同じ字を書いた。

「同じ字だ」

カインは驚きながらも記憶のピースが一つそろつたことだけがわかつた。

カインはバッジをもつ一度ポケットの中にしまい、

「ありがとう」

お礼を言い、カンパニーを出ようとした。

「そう言えば最近帝国の動きがあつたらしいな。あなたの国は丈夫なのかい？」

マスターは何気なしに聞いたつもりで言った。

「え、ええ、大丈夫だと、思いますよ。精霊騎士がいるのだから」

一瞬動搖したカインだったが以前にルナから聞いた事をそのまま言い店から出て二度目の驚きがあつた。

そこに居たのはメイド服を着た女性が五人、店の外で待っていたのだ。

「あなたたちは？」

ルナも驚いていたがすぐにいつもの状態に戻り聞く。

「私たちは、我らが国王の愛娘にして、我が国の象徴。アレクシア・ウェンライト様からあなたをお連れするようことづかってあります」

カインは三度目になる驚きに顔を見合せながらも、「わかりました」

カイン達は彼女たちについて行こうとする

「そちらの方は？」

メイドの一人はまるで人形のよつて面つづり

「構わない。彼女は私の連れだ」

「わかりました」

ルナは一瞬カインが遠い存在なのではないのかと思えた。

マーメイドキャッスルと呼ばれるウェンディアの城は水の色を思

わせる蒼色の壁で作られ、中にはサン「」や魚の絵が飾つてあった。

「お言えばギルドバッヂの事聞き忘れたな。ま、いいか何とかなるだろ？。

そんなことを思つながら廊下を歩いて行くと、メイド達が他のドアよりも大きく頑丈な観音開きのドアで立ち止まり、

「ああ、」の奥に姫様がおります

メイド達は深々と頭を下げた。

カイン達は緊張した面持ちで奥にある、玉座の間へ進む。

玉座の間は他のどの部屋よりも広く、王が座るのである椅子は数十段にも及ぶ階段の先にあり、とても小さく思えた。

階段までを赤絨毯の道を両サイドに兵士や騎士、臣下が並んでいた。

ゆづくつと歩くカインの跡を追つよつに歩き、階段の少し手前で立ち止まつひざまづく。ルナもあわててひざまづく、

「お呼びいただき、光栄で、」とこます

カインは頭をさげこむ。

「堅苦しい事はよい。頭をあげよ」

カインは頭をあげた。

お姫様はカイン達と同じか下くらいの年に見えたがとても可愛らしいピンクのドレスをまとい、金色の髪がより一層彼女の存在を引き立てていた。

「お久しぶりです。ヴァン」

彼女はカインと面識があるようだが、カインは記憶を無くしているのでわからなかつたが、どこかで見た気がしないでもなかつた。

「はい。何年ぶりでしょつか」

取りあえずカインは話を会わせることにした。

「ええ、もう二年になりますね。でも、貴方と過ごした日々は昨日の事の用に思えますわ」

彼女は遠くを見つめるよつた眼差しで天井を見つめた。

「オホン」

突然、頬を紅潮しそれを隠すためなのか咳払いをし、

「今日はここでゆっくりしていきなさい。それと後で、私のところへ来なさい」

そう言つと、彼女は立ち上がり椅子の脇にあるドアを開き玉座の間から出ていった。

17・アレクシア

カイン達は城の応接室にいた。

応接室は客人が泊まることが出来るようになり、ベッドが置いてあった。ソファは長老の家にあったものではなく、凄く座り心地がいい革が張られていた。

「ねえ、何だかすごいことになつてない?」

ルナは窓の外から視線を外してソファに座っているカインを見た。

「そうだね。まさかお姫様に呼ばれるとは思つても見なかつた

カインはソファから立ち上がりつて、

「さてと、それじゃあ、行こうか

「え? どこに?」

ルナが聞くがカインは無言のまま部屋を出て行つてしまつたので、慌ててルナはカインを追つ。

複雑な道をカインはなぜかスルスルと通り抜け、十分もたたないうちに塔の最上階についた。

「ここだ

カインはドアをノックしよとした瞬間、ドアが開き、

「ヴァン様」

と言いながらカインに向かつてアレクシアが駆け寄つて抱きしめた。

「あ、アレクシア様！？ 何を？」

カインは驚きと動搖でオロオロしていた。

「だつて、なかなか会いに来て下さらないのだもの」

カインから少し離れて、嬉しそうに言つ。

「そういえば、この方は？」

アレクシアはルナの方に向ぐ。

「お、お初にお目にかかります。わ、私は、ル、ルナ・ギルバートと言ひます」

少し緊張した面持ちで言つルナを見て彼女はクスッと笑つた。

「あの、中に入つてもよろしいですか？」

カインは遠慮がちに言つと、手を口元に当てて、

「あ、そうですね。中にお入りになつて夜のおと…」

「ちょっと待つたーー！」

ルナは思わずアレクシアの話に横やりを入れた。

「あら、何かしら。私とこの方は契りを交わした仲なのですよ」

平然と言うアレクシアに対し、一人は互いに顔を見合せてしまった。

「と、とつあえず。中に入つていいのですよね？」

カインは改めて、言つと、

「ええ、いいですよ」

そう言つて中にまねていくれた。

アレクシアの部屋は、応接室よりも一倍ほど広く、赤いじゅうたんが床一面に敷き詰められ、ピンクの天涯付きベッドと年季が入つていそうな机や椅子が並んでいた。

彼女は使いの者にティーセットを運ばせてアレクシアが紅茶を入れる。

カインはジッとアレクシアの顔を見つめ、彼女はそれに気付いたのかニッコリとほほ笑んでくれた。

「本当のところ、彼女は何者なの？ヴァン」

アレクシアはティーカップを置く、

「彼女は命の恩人なんだ」

カインは今までの出来事を話し始めた。

天空から落ちてきたこと、記憶が全てなくなっていたこと、旅に出て帝国兵に間違われて捕まつたこと、脱獄したがタートネックを退治したことなどだ。

「そうですか。たぶん記憶がなくなつた原因は精霊たちがあなたを守つたために起きた、一時的な現象でしょう」

彼女はそう言ひと紅茶を一口飲んだ。

「とはいって、自分の事が少しでも分からないと不安でしょう。私でよければお話しますよ」

「ぜひお願ひします」

カインは思わず身を乗り出していた。

「それでは、お話しますわ。まず、あなたの本当の名前は、ヴァン・ビグナー。バハニア王国の精霊騎士で、最年少で精霊騎士に任命されたのです。ちょうどあなたと出会つたのはその頃でした……」

巡礼でバハニアの聖域に向かうアレクシアを囲うように、前後に二人づつ護衛の中に、ヴァン、今のカインが同行していた。

「アレクシア様。大丈夫ですか？」

山道の半ばを過ぎたころ前に居た、ヴァンがアレクシアが見えるように首だけ動かしてから言ひ。

「ええ、城のドレスより、今の方がずっと動きやすいので大丈夫ですよ」

アレクシアは動き憎いドレスでは無く、動きやすい黒色のなめし革のズボンに水色のジャケットを羽織った姿で細身の剣を腰につけていた。

「ならよろしいのですが」

ヴァンはそいつと前を向く。

「あなた達は、どこの出身なのですか？」

不意にアレクシアは護衛の人たちに聞く。

「私と彼は、名もない村に住んでいました」

後ろの二人は言つ。

「私はバハニア城下町で生まれ育ちました」

ヴァンの隣にいた騎士Aがいい、

「私は、生まれたところは知りませんが、城下町で育ちました」

ヴァンはそう言つと、

「まあ、そうでした。でも、確かに名家の出身だと聞いていたのですが」

バハニアの城を出る前に国王陛下に紹介された時、名家であるビグナー家の一子と紹介されていたので、多少は驚いた。

「確かに、私はビグナー家の息子ですが。養子ですよ。もともとは孤児ですから」

暗い過去を持つているかのよつた言葉だったが、本人はにこやかだった。

その後は無言のまま山道を歩き続け、両サイドが高い崖に差し掛かつた時、異様な唸り声が何重にもなつて響き渡つた。

「な、何だ？」

後方に居た一人があたり見渡したが茶色の地肌が見えるだけだった。

「あそこだ」

ヴァンが崖の上を差した。

崖の上には、二十頭あまりのオオカミに似たバウウルフがいた。

「あ、あんな数、見あた事ねえ」

「ひるむな。姫をお守りしろー。」

思わずたじろぐ騎士たち三人に対し、素早く支持を出すヴァン。

後方にいた兵士が剣を抜き立ち向かう。

「グゥルルル」

低い卯なり声をあげながらジリジリとヴァン達の間合いを縮めていく。

「う、ウワアアアアア」

「ば、バカ！」

ヴァンが叫ぶのと同時に一人の兵士Aは迫つてくるバウウルフに耐えきれず群れの中へと剣をガムシャラに振り回す。

バウ威尔フは一斉に兵士に襲いかかり、兵士は瞬く間にのつりに見えなくなり、血が時々どびあがつてているのが見えた。

三分も経たないうちに再び、ヴァン達のこもとの間に体ごと向けた。

バウ威尔フの群れの間からさつきの兵士が見えるがあまりにも惨い姿になつており、じいて言つながら顔がつぶれた猫のような感じがした。

「見てはいけません」

ヴァンはアレクシアをすぐに物陰に隠した。

「姫様はここに居て下さい」

岩陰に隠れて身を縮こませ、ヴァンがいい、バウ威尔フの撃退をしようと元の位置に戻ろうとす。

しかし、何かに袖をつかまれ尻もちをつきかねになつたが、なんとか踏ん張つて耐えた。

カインが振り向くと体を震わせて怯えた目でカインを見つめていた。

「アレクシア様」

ため息交じりで呟く。

「一人にしないで」

声音が震えているのがわかり、すでに戦闘に入っている一人を見てから、アレクシアを見て、

「わかりました」

そう言つと、人差し指と親指で輪を突くり、口にくわえ、思いつきり息を吹く。甲高い音が崖を反射して何重にも響き渡る。

兵士はヴァンの方を向いた。ヴァンはうなずくと兵士たちはバウルフから少し距離を置いた。

アレクシアは不思議に思いヴァンを見ると、それに気づいたのか微笑んだ。でも、眼は真剣な眼差しであたりを見渡し、兵士が距離を置いたことを確認すると、小さく呟いた。

「トルネード！」

ヴァンが呟くように言つと、今まで風が吹いていなかつた渓谷に突風が吹き、群れの中央で渦を巻いた。

竜巻になつた風は吸い込まれるようにバウルフの群れを中心に入れ、空高く舞い上がりながら体の至る所から傷を作りだしていた。

風がやみ地面に落ちたバウルフ達はもはやぴくりとも動かなかつた。

「何が起きたの？」

アレクシアは今まで見たことがなかつた風属性の魔法に驚きを隠

せなかつた。

「アレクシア様。決してあの者たちを見てはいけません」

ヴァンはアレクシアに忠告をし、手を引いた。

彼女は言われた通りにしていたが、最後の一體を通過しようと田があつてしまつた。

その瞬間、死んでいたはずのバウ威尔フはムクリと立ち上がつた。

「あやあ……」

アレクシアは短く叫び、ヴァンたち三人は一斉に剣を向けた。

バウ威尔フは一度絶命しても、一定の時間内に誰かの田があつと脳が指令を出す。

その指令は『殺す』と『食す』という二つの指令だ。

それに、前も変わらざの名は、デッドウルフといった。

兵士Bと騎士Aはアレクシアを守りたとして、アレクシアとトッドウルフの中間に立つた。

デッドウルフはそれはこの世の物とは思えないほどの中つなり

を喉で鳴らし、襲いかかった。

兵士Bは剣で防ごうとしたがコンマ数秒の差でのど元に噛みつき、その勢いで倒れこんでしまった。

「私が食い止めます。姫様を連れて早く行け」

騎士Aは剣を構え叫んだ。

「しかし、」

ヴァンは一瞬迷った。このままおいて行けば彼が死ぬのはほぼ確実。ただでさえバウ・ウルフの倍以上の体力と力を持つデッドウルフはどんなに鍛錬を積んだ精靈騎士でも一人で容易の事では無いのだ。

「いいから行け!! 僕にかまう事はない。姫様をお守りしろ」

田で見えるほど剣が震えているのがわかった。きっと彼は怖いと思つたに違ひない。それでもここにどどまりアレクシアを守ることにきめた彼にヴァンは心を決めた。

「あとで会おう」

ヴァンはもう会えないであろう彼を置いて、アレクシアを連れて走り出した。

「さあこい化け物め」

一人残された騎士Aはもはや恐怖を通り越して威勢よくデッドウルフを挑発する。

その挑発に乗るかのように十メートルは離れているはずなのにもかかわらず、数歩の助走し一回のジャンプで騎士に飛びついた。

ヴァンは風の聖靈魔法を短く唱える。

しばらくすると戦線から離脱するようにしたのだ。

少し離れた所で足をとめた。

山道から林道にも足を止めてよつやく気が付いたほど周りが見えていなかつた。

「あの人は大丈夫ですか」

アレクシアを木の陰で少し休めると、騎士の事を気にかけた。

ヴァンは一瞬ためらつた。

それに普通一、二匹で群れをなすはずだが、異常に多いバウウルフの群れ、あの三人が無事にいられるのは、ほほほ無に等しい。

「大丈夫ですよ」

ヴァンは安心させるためウソをついた。

「そう、それならいいけど」

歩き始めようやく聖域に入ることができた。
その間、しきりに後ろを振り向くことが多く、やはりあの三人が
気になるのだろうか？

「本当に大丈夫なのでしょうか？」

ぱつりと駆くアレクシアにヴァンは心に剣で突き刺したような痛
みが走ったような気がし、苦笑いを浮かべている自分に気づき咳払
いをする。

「ここをくぐれば聖域です」

田の前にある大きな田い壁にシタガついた閉ざされた門を指さし
た。

「ここでくぐれば」

自分に言い聞かすように言つアレクシアはジッとの閉ざされた
門を見つめた。

ヴァンは門の前までゆっくり歩き、何かをつぶやき始めた。
言い終わると同時に門はゆっくりとギギッといつ軋み音を立て
ながら開き始めた。

「すじー」

思わず声に出したアレクシアは田の前の光景に田を奪われた。

開かれた門の奥には古代樹が天空を貫き、開かれた中央には白い山がそびえ立つていて幻想的な風景がそこにはあった。

「行こうか」

いつの間にかアレクシアの横に立っていたヴァンがいう。

「え!? ええ、行きましょうか」

ヴァンに話しかけられ、我にかえつた。ヴァンは不思議そうな顔をした。

ヴァンの不思議な顔がなぜかアレクシアの瞳にはまり笑ってしまった。

「何を笑っているんですか?」

ヴァンは怒つていてるのか笑つてているのか分からぬ表情をしていた。

「だつて、ヴァンの顔があまりにもおかしかったから

「そんなこと言うなよ」

そう言いながらも笑つてしまつ、ヴァンであった。

二人は門を潜り古代樹の森を歩き始める頃にはすでに太陽が地面上に埋まるうかとしていて空を赤く染めていた。

「暗くなってきたから、この辺で今日は夜を明かそうか

「え?」

アレクシアは驚いた。それは、今の持ち物がアレクシアの含めてもステイツク状の携帯食糧が四つほどあるだけで、他には何にもなかつたからだ。

ヴァンは彼女の顔を見て、

「少し、隣に来て」

と言う。アレクシアは言われたとおり、ヴァンの隣に来ると、

「V a l b o s s . S p a c e o f r e s p o n s e a n d m o t i o n . . . o p e n」

ヴァンは手を空中に手を出し、唱え始めた。

最初の単語を唱つと田の前に青い光の魔法陣が表れるのを見て、

すぐに魔法だとわかった。

最初の単語は魔法を使うための準備段階で始動キーと言つらしい。人により始動キーがかわり、その単語を使わなければ精神の消費が激しくなるらしい。

手を出した数センチ先に白い光の切れ目が現われた。

「空間魔法？」

アレクシアは、ボソリと呟く。

ヴァンはニッコリ笑い光の切れ目に手を入れ何かを探つていうよう化のように腕が上下に動いていた。

「あつた」

ヴァンは光の切れ目から手を抜きると何やらでかいものが出てきた。

「それは？」

「C l a u s e ……泊まる道具」

光の切れ目を閉じ、ヴァンはそう言いながらでかい物を広げその中にあつた袋を取り、中に探し椭円形の筒のような黒い箱を取り出した。

アレクシアは初めてみる箱に興味を抱き、ヴァンの行動をじっと見つめていた。

ヴァンはアレクシアが見つめているのを気にしないとしながら、その辺にあつた石を円形に囲みその中に枝を放射線状に組み、

「ヴァルロス B u r n」

パチパチと燃え始める枝を見てアレクシアは腰を下ろした。

いつの間にか箱の中に水が入つていて、その中に半分に折った携帯食糧を入れた。

「アツ」

思わず声を上げるアレクシア。

それは、携帯食糧が水を吸い込み段々とふやけて笠をまじていつたからだ。

「どうぞ」

ヴァンはそう呟つと、アレクシアにスプーンと一緒に渡した。

「ありがとう」

アレクシアは受け取り、一口食べてみる。

何とも言えない独特的の風味が口の中で広がつていき、

「おいしい」

心からそう思えた味だった。

「向こうでは味わったことがない味だろ」

得意げに言うヴァンにアレクシアはクスッと笑い、頷いた。

「何を入れているの？」

「秘密」

ヴァンは悪戯な笑みを浮かべていた。

「教えて」

「やだ」

「教えなさい」

「いやだ」

「教えて」

「やだ」

「あなたって不思議な人」

初めて会った時から親近感があるような感覺だった。

「え？」

ヴァンは不思議そうな顔をしてアレクシアを見る。

「ううん。なんでもない」

ちょっとと不満そうな顔をするヴァン。

だけど、深く追求する気もなく、

「私は、夜は危険ですので見張つてますので、安心して寝て下さー」

アレクシアは戸惑つた。

「でも、私は……」

「いいから」

ヴァンはアレクシアの言葉をさえぎり、背中を押しながら二つの間にか組み上げられていたテントの中に入れた。

「お休み」

テントの扉代わりの垂れ幕を下ろす。

アレクシアはムスッとし顔をしながらも動物の皮を羽織り、横になつた。

いつの間にか眠つてしまいふと田がさめるとテントの外から声がした。

あら？ あの人たち追いついたのかしら？

「どうだつた？」

声からしてヴァンの声のようだ。ただし少し深刻なような声。

「うーんとね。三人の骨が残つていたよ」

子供っぽい声が耳に入つてきた。

違う、誰だろう

アレクシアは聞き耳を立てた。

「そうか……奴等の動きは？」

「まだわからぬ。何せ彼奴らは我々を通せないよう結界を張つておるからのう。中を調べるのは不可能じや」

今度は老人の声がする。

アレクシアはそつとテントから顔だけ出してヴァン達の声がする方を見て、驚きのあまり声が出なかつた。

精靈！？

そこに居たのは四大精靈。すなわち火、水、風、土の精靈たちだつた。

「これから、どうなされる」

焚火の中で小さな炎の人型になつてゐる火の精靈はドスのきいた声でヴァンに聞く。

「とりあえず、あの姫を精靈王様に会わせることが先決だ。まあ、国が傾くことがなければだが」

アレクシアはヴァンが示唆することが分からなかつた。

「そうね。あの子は私、私たちの大切な人なんですからね」

水の精靈は美しいほどの女性になりヴァンの隣に座つた。その瞬

間、アレクシアはイラつゝような安堵の様な、何とも言えない気持
ちになつた。

「ああ、そこでだベネット。精靈王に会わせるまで彼女の近くにい
てほし」

ベネットと呼ばれた水の精靈は優しい笑顔でヴァンを見て、
「それは、彼女の判断にしましょ」

ベネットはアレクシアのこるテントを見た。

「起きていたのか」

呆れたような口調で言つヴァン。

おずおずと姿を現すアレクシアはヴァンの隣に座り、

「えーと、聞いていい？」

戸惑い気味にヴァンに聞くと、

「たぶん、思つてゐる通り、俺は精靈騎士だよ」

ヴァンは二ヶ口と笑い、ベネットに田で会図した。

「どうなされますか？」

美しいほどの女性の微笑みには、ものすこゝ氣迫が満ちていたよ
うに思えた。

「え、えつと。お願いします」

気迫に押された。

「ベネットいい加減に元の姿に戻つたらどうだ？ 見られてこると
落ち着かない」

ヴァンが言つのは無理もない。他の精靈たちがジト田でこちらを見
てゐるのに耐えきれなくなつたのだった。

「いいじゃない。嫌いじゃないんでしょ」

不敵な笑みで言つベネット。

こいつ、楽しんでるな

そんなことを思いつつも、

「もしこんな姿でいるよつなら、蒸発させてやる」

半ば脅し気味の口調で言つて、炎の精靈に会図を送るふりをする。

「ええ！？ もうわかつたわよ

そう言つと、眼を閉じると体が眩いほどの光が発せられアレクシアは思わず目を閉じてしまった。

アレクシアが目を開けると、美しい女性だった水の精靈は小さな人魚の姿をしていた。

「これでいいでしょ」

ベネットは頬を膨らませて怒っているようだ。でも、他から見えればまだあどけない少女が駄々をこねるようになしか見えなかつた。それに元の姿にもどつたとはいえその妖美な美しさは変わらなかつた。しいて言えば綺麗から可愛いに変わつたぐらいいだらう。

「それでいい。ほら水」

どこから持つてきたのか、水をいっぱいにしたバケツをだす。ベネットは水の中に入ると、不適な笑みを浮かべながら、テントの後ろに置く。

「こらーー！　そこに置かないでよ」

ベネットはポカポカとヴァンの頭を叩く。

「わかつたよ。ここならいいだろ。悪い、ルッテンちょっとと避けてくれ」

今度は焚火の上にぶら下げる。

ルッテンと呼ばれた火の精靈は怪訝そうな顔をしたが素直に避けてくれた。

「何でそこなのよ。ちゃんとしたところに置きなさい」

さらに怒らせているにもかかわらず、そう見えないアレクシアはクスッと笑つてしまつ。

「そこ、笑うな」

ベネットの怒りの矛先がアレクシアに向けられるが、ヴァンが知る限りベネットは熱い所が苦手なのでいつまで保てるか見ものだつた。

「すまないな、しばらぐ」「らえてくれ」

ベネットが説教を始め、ヴァンは隙を見てアレクシアにささやい

た。

アレクシアは「クリと頷いた。その間にモベネットの説教を続けていた。

しばらくするとモベネットに変化が訪れていた。

「だからね、私がいいたいのは…………熱い！！」

顔が赤くなり始め、ゆでダコならぬゆで人魚になっていた。熱さから逃げるべく何処かに言ってしまった。

他の精霊達は呆れはて苦笑いを浮かべていた。透も同じで、苦笑いを浮かべていた。

空が明るくなり始め、ヴァンは立ち上がり、「さてと、明るくなつてきたし、出発しようか？」

ヴァンはアレクシアに聞くと、首を縦に振った。

昨日と同じように空間魔法を使いテントとかをしまつと、古代樹の森の奥へと進み始めた。

あれ？ 精霊さんたちは？

いつの間にか居なくなつていた精霊たちに気付くアレクシアはきっと自分の住みかに戻つたのだろうと思ひ準備を整えるのだった。

ヴァン達が歩き途中、苔のよつな薦を切り開き、奥へと進み半日ほど過ぎてようやく森を抜けようとした所まで来ていた。三度目になる休憩をとり、ヴァンは途中で川の水を汲んだ水筒を開け、アレクシアに渡した。

「ありがとう」

アレクシアは水筒を受け取り、一口飲みヴァンに渡し、ヴァンは受け取り腰に下げる。

「この山を登れば、会えます」

ヴァンは田の前の山を見た。

「「この山……ですか？」

見上げた山は緩やかな曲線ではなく、何かに切り崩されたような地肌が見え、入れないのではないかとうらうらいの巨大な柱のような山がそこにはあった。

「大丈夫です」

優しくそして自信満々に叫びヴァンを不思議そうに見つめているアレクシア。

ヴァンはその山に沿つて歩き始め、あとを追つようにアレクシアがついてきた。

地肌がデコボコとし、所々、黄土色の土の塊が草原の上に落ちていた。

このかたまりが落ちたらどうしよう。

そんなことを思いながらも足早に歩いているヴァンを必死に追いかけていた。

しばらく歩いていると一際大きくなれて、ちよつとした洞窟になっている所に着いた。

「「この奥にあの方がいます」

ヴァンは静かに言うと、

「どうとづ、ここまで来たのですね」

呟くように言うアレクシア。

「さあ、どうぞ」

ヴァンはアレクシアに中に入るよう勧め、彼女は気を引き締めなおし、薄暗い洞窟へと入つていった。

「え？」

洞窟の中なのに明るい？

アレクシアは上を見上げるとまだ少ししか日が傾いていない太陽と青い空がそこにあつた。

ようやく気付いた。今いるといひは山の頂上。さつき入った場所は魔法で転移したのだ。

「よぐぞ參つた。水の国の姫君よ」

「どこからともなく聞こえる威圧的な声に瞬間的にアレクシアは瞬時に態勢を低くする。

「長い旅路であつただらう。樂にしてよい」

威圧的であつた声が急に優しく聞こえ不思議と元の態勢に戻つた。
「そして、ヴァン・ビグナーよ」

いつの間にかアレクシアの後ろに態勢を低くしたままのヴァンがそこに居た。

「精靈王バハムート様、御機嫌麗しゅ「ハ」ゼセコます」

とりきまつた台詞を述べるヴァン。

「お前も、わしの前では頭が上がらないか」

まるでずつと見ていたかのよひに言ひ精靈王に内心ビックリして

いるアレクシアだつた。

「そんなことは」

ヴァンは驚いて顔をあげた。

「よい。わかつておる」

アレクシア達のいふといふが一瞬暗くなるのと同時に一陣の強い風が吹き、アレクシアは目を閉じてしまつ。

目を開けるとそこに、老人が一人立つていて。

「あなたが」

老人が頷いた。

アレクシアは初めて見る精靈王を見て、ハツとして跪くとする。

「よい、さつきもいつたであるひ。樂にしてよこと」

優しく言ひ精靈王。

アレクシアは後ろにいるヴァンを見ると、彼は頷いて微笑んだ。

「それでは、お言葉に甘えさせてもらいます」

再度、元の態勢に戻り、

「巡礼はさぞ大変であつたわ」

老人はアレクシアに言ひ。

アレクシアは今までの巡礼でどんなことがあつたかを話し始める。

無数の獣で仲間をはぐれてしまつたことも話した。

「よく、話してくれた。これからも国を治め平和に生きよ」

精靈王は頷き、ねぎらつ。

「ヴァンよ。よくここまで姫君を守ってくれた。わしは知つてある

ぞ。あやつらは無事じやよ」

アレクシアは何の事か分からなかつた。でもヴァンはホッとした

ような顔をしていた。

「そうですか」

笑顔が思わずこぼれるヴァン。

「ホッホ。わしからの加護じや」

精靈王は何かを呑くと2人の体が光に包まれる。そして、「これで、わしの巡礼はおわりじや、町まで送るわ」

「ありがとうございます」

ヴァンがそう言つと臉を閉じた。アレクシアも目を閉じると、精靈王がまた何かを呑くと一瞬の間があつて、強い風が全身に受けた。

アレクシアは目を開けるとそこには地面が、

「え?……きやああああ」

今いる場所がようやく理解できたようだ。彼女がいのところは空の上。今まさに落下してゐるのだ。

「大丈夫」

ヴァンの声が風の音の間から響き、手を強く握る感覚が走つた。地面が徐々に近づき、もはや地面にぶつかると思った瞬間、ヴァンは彼女を引きよせ、お姫様だっこをした。

それと同時に体が急に軽くなつたような感覚し、ヴァンは態勢を崩さずに着地できた。

着地した場所は門の前で着したヴァンは彼女を下ろすと、「行きましょうか、アレクシア様」

ヴァンはアレクシアの手を引いて町の中に入つて行つた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1298g/>

アーセニア

2010年10月9日06時46分発行